

報告：台日オーストロネシアおよび海洋研究者交流ワークショップ

土井冬樹・黒崎岳大・古澤拓郎・明星つきこ
(天理大学・東海大学・東京大学・東洋大学)

はじめに

台日オーストロネシアおよび海洋研究者交流ワークショップ (Taiwan-Japan Scholarly Dialogues on Austronesian and Maritime Connections Workshop 2026) は、2026 年 5 月 4～6 日の 3 日間、台湾の研究プロジェクト「南島連結：跨領域研究之新航向 (Austronesian Connection Project)」と、人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業「海域アジア・オセアニア研究プロジェクト」(以下 MAPS と記述する) (代表：国立民族学博物館・小野林太郎) との共同研究の一環として、台湾と日本の研究者の交流を目的に行われた。台湾からは、研究プロジェクトに関わるオセアニアおよび東南アジア、また日本を対象とする研究者、また台湾太平洋研究學會に所属するメンバーが参加した。日本からは主に MAPS のメンバーとオセアニアに関連する学会の会員が参加した。

発表を行ったのは台北にある中央研究院で、1 日目は参加者の紹介、博物館視察、発表 (土井執筆)、2 日目は宜蘭 (イーラン) でのワークショップ (黒崎執筆)、3 日目は台湾原住民タイヤルの集落での交流 (古澤執筆)、午後に中央研究院に戻って発表 (明星執筆) という流れであった。本ワークショップは、未来に向けた関係性構築という側面が強く、一過性のものではなく継続的な交流としたいとの思惑が強かった。その応答の一つとして、まずは報告を執筆するに至った。また、ワークショップでは、オセアニア・東南アジアの様々な地域を対象とするさまざまな分野の研究者の交流があったことから、ポリネシア、ミクロネシア、メラネシア、東南アジアで調査を行い、分野も異なる参加者で執筆を分担し本報告を書き上げることとした。お声がけに賛同し協力してくださった執筆者の皆さまには感謝申し上げます。

1.1 日目

午前中に、中央研究院に集合し、大きな会議室でワークショップの短い概要の紹介、その後約 2 時間かけて、総勢 30 余名の自己紹介を行った。昼食にお弁当を食べてから、中央研究院民族学研究所博物館を視察した (写真 1)。キュレーターの案内を聞きながら、1 時

間ほどかけて原住民展示の部分を回った。

最初の展示ブースはタイヤルについて取り上げていた。展示案内は全てタイヤル語だった。南島連結プロジェクトの代表の郭佩宜は、彼女の同僚にタイヤル出身の人がいたために、かれらの言葉を用いた展示を作ることができた、と話した。他の展示部分は全て中国語で説明が書かれており、原住民の言語で展示が作られているのはタイヤルの部分だけだという。



写真 1. 中央研究院民族学研究所博物館の前にて
(撮影：土井)

博物館には、台湾の國家寶藏（National Treasure）に登録されているものが二つあるという。一つはパイワンの頭目家屋の祖霊柱で、もう一つはアミの祖屋彫刻柱である。それぞれ、1950年代に収集されているが、原住民コミュニティから預かっている状態であると説明があった。アミの祖屋彫刻柱に関しては、その地域のシャーマンが、「寒いから連れて帰ってほしい」という先祖の声を聞いたことがあるという。そのため返還についても考えられたが、管理できる施設が村にはなかった。コミュニティでの話し合いを経て、彫刻柱に宿る先祖の魂だけを村に連れて帰り、彫刻柱そのものは博物館で管理してもらうというところに落ち着いたのだという。アミに出自を持つ参加者の一人は、その彫刻柱にアミ語で挨拶をしたのち、ビンロウをお供えた。

博物館の視察後、一行は会議室に移って、合計 10 本の発表を聞いた（写真 2）。最初の 6 本は、台湾日本それぞれのプロジェクトや学会の活動を共有するための発表であった。日本では MAPS のタイトルにみられるようにオセアニアや東南アジアという地域区分が明示的にあることが多いが、台湾ではオーストロネシア語族に着目する傾向が強かった。原住民研究や本土中国との差別化を図るという意味でも重要ではあるのかもしれないが、人類の移動の流れに基づく言語や文化を考える上で、地域区分を採用するよりも説得的であるように感じられた。

残りの 4 本の発表は、研究発表であった。オセアニアと台湾における伝統航海術の復興と先住民/原住民運動、東アジアとパプアニューギニアの船の構造と造船技術、ニューカレドニアにおけるヤムの消費と先住民の生活の関わり、うまく機能しないフィジーにおける海域の保護管理政策について発表があった。筆者は、自身の専門（先住民研究）と関わって、特にフィジーの発表に興味を持った。フィジーでは、海域を政府が所有していることになっているが、管理は先住民に任せているという。ニュージーランドやクック諸島で



写真 2.1 日目の発表の様子（撮影：土井）

は、海域等の保護管理を先住民の伝統的な方法（例えば *rāhui*）に基づいて行うことがある。フィジーでもそれが目指されているが、土地や海域を政府が所有しているため、実質的には先住民が管理していたとしても、先住民の知識を保護管理の実践に持ち込むことができないでいるのだという。

発表のあとは、中央研究院の施設内にあるレストランで円卓を囲み、食事をしながらの交流となった。

2.2 日目

2 日目は早朝に台北の中央学術院をバスで出発し、台湾東部の宜蘭県に向かった。宜蘭県内で訪れた亀山島（午前）と蘭陽博物館（午後）は、今回の滞在を通じてとりわけ印象深い訪問地であった。両者は一見すると性格を異にする。亀山島は海上に位置する島嶼であり、観光船による渡航を通じて自然景観や島内空間を身体的に経験する場であるのに対し、蘭陽博物館は宜蘭の自然と文化を総合的に提示する地域博物館であり、展示・建築・教育活動を通じて土地の理解を促す施設として構想されている。しかし実際に訪問してみると、両者はいずれも宜蘭という土地を単に「見る」対象としてではなく、その自然と歴史を「学ぶ」ための空間として編成されているように思われた。

2-1. 亀山島訪問

亀山島への訪問は、烏石港から船で海上へ出るところから始まる。港を離れて進むにつれ、海上に浮かぶ島の輪郭が次第に明瞭になり、亀山島が単なる観光目的地ではなく、宜蘭の景観世界を構成する象徴的存在であることが実感された。実際、亀山島は宜蘭沖に位

置する火山性の島であり、その特異な地形と海景によって宜蘭を代表する景観の一つとみなされてきた（写真 3）。一方で、上陸後に目に入るのは豊かな自然景観だけではない。埠頭周辺に残る集落跡



写真 3. 荒れる海上から撮影した亀山島（撮影：黒崎）

や学校跡は、この島がかつて生活空間であったことを示しており、現在の観光空間としての姿と過去の生活世界とが重層的に立ち現れる。

亀山島の意義は、その自然の卓越性のみに還元されない。20 世紀後半には軍事的管理のもとに置かれ、住民は島外への移住を余儀なくされた経緯を有している。観光利用が解禁され、現在では一定の管理と人数制限のもとで観光客の上陸が認められているが、この制度的枠組み自体が、同島がレジャーの対象であると同時に、保全と統制の対象でもあることを示している。現地での経験に即していえば、亀山島は自然観光の対象として消費される場である以上に、軍事化、移住、空間利用の変容といった歴史的過程を内包する「記憶の空間」として把握されるべき場所であった。観光者は島の景観を眺めるだけでなく、その風景に沈殿した政治的・社会的履歴を読み取ることを促されるのである。

2-2. 蘭陽博物館

これに対して蘭陽博物館は、宜蘭の自然と人文を統合的に提示する地域博物館として位置づけられている。同館は旧烏石港跡に立地し、湿地、烏石礁、さらに沖合の亀山島を視野に収める環境の中に建てられている。実際に現地に立つと、建築そのものが展示の外部にある補助的要素ではなく、宜蘭の地勢や景観を語るメディアとして機能していることが理解できる。特徴的な外観は北東海岸にみられる地形を参照して設計されており、高い部分が亀山島の方向を向く構成となっている（写真 4）。したがって来館者は、展示室に入る以前から、すでに建築と立地を通じて宜蘭という土地の自然的・歴史的文脈へと導かれているといえる。

展示空間においても、蘭陽博物館は宜蘭という地域を総合的に理解させる構成を採って



写真 4. 蘭陽博物館の外観（撮影：黒崎）

いる。山・平原・海という環境条件を基軸としながら、そこに暮らしてきた人びとの生活、産業、文化、歴史の展開が配置されており、人間と自然との関係性を立体的に把握できるようになっている。観覧の過程では、個々の資料を断片的に見るというよりも、宜蘭という土地がいかに形成され、その上にいかなる生活世界が築かれてきたのかを、環境との相互作用の中でたどる感覚が強い。さらに同館は、展示機能にとどまらず、環境教育や体験型学習にも重点を置いており、湿地生態、文化景観、海洋資源、地域文化などを結びつけながら学ぶ教育拠点としても位置づけられている。その意味で蘭陽博物館は、地域の歴史を展示する施設であると同時に、地域の歴史や環境をいかに学ぶかを来館者に経験させる「教育装置」でもある。

2-3. 考察

以上を踏まえると、亀山島と蘭陽博物館を接続する鍵概念は、「場所の再解釈」にあると考えられる。亀山島では、かつて生活と軍事の場であった島が、現在は自然・歴史・記憶を学ぶ観光空間として再編されている。他方、蘭陽博物館では、宜蘭の自然や歴史が展示・建築・教育活動を通じて再構成され、来館者が地域の成り立ちを総合的に理解するための知的空間が形成されている。前者は現地そのものを歩く身体的経験を通じて、後者は建築と展示の媒介を通じて、それぞれ土地に刻まれた記憶へと来訪者を接続するのである。形式上の差異は大きいですが、両者はいずれも自然を景観として提示するだけでなく、その背後にある歴史的・社会的文脈を可視化し、学習可能なものとして再編する点で通底している。したがって今回の訪問記録は、自然観光と博物館見学という二つの別個の体験として整理

するよりも、宜蘭において自然・歴史・教育がいかに接続されているかを考察する報告としてまとめることが適切であろう。亀山島は自然と歴史の痕跡を身体的に経験させる場であり、蘭陽博物館はそれを地域全体の文脈へと位置づけ直す知的・教育的装置である。両者を往還的に捉えることで、宜蘭という土地が観光の対象であると同時に、その記憶と知を学び直すための空間として提示されていることが、より明確に理解できた。

3. 南澳郷のタイヤル人

タイヤル人（別名、アタヤル人）は、台湾北部・北東部を中心に約 8 万 5000 人の規模を持つ民族集団である。タイヤル語はオーストロネシア語族に属し、タイヤル人は伝統的には山岳部の傾斜地に居住し、焼畑農耕や狩猟採集を営んでいたとされ、農耕技術をもったオーストロネシア語族のルーツを考えるうえでも興味深い。

今回、中央研究院と日本の研究者の合同調査として訪れたのは宜蘭県南澳郷で、地形としては急峻な山の間を大きな川が流れる溪谷から河口にかけての地である。中央研究院の調査や展示に協力してくれているという、タイヤル人のウィラン氏が案内をしてくれた。

3-1. サヨンの鐘

まず案内されたのは、「サヨンの鐘」の石碑である（写真 5）。戦前、同地の巡査兼教師として日本人が駐在していた。1938 年、その巡査に召集令状が届き、村をでて出征することになり、村の教え子たちが荷物運びを手伝った。しかし、教え子の一人サヨンという少女が、増水した川で足を滑らせて鐘とともに沈み命を落とした。その鐘は引き上げられ、やがて日本植民地政府は、先住民族が出征する日本人のために命がけで貢献した美談としてこの話を広め、「愛國乙女サヨン遭難の碑」を立てた。サヨンの鐘は、李香蘭主演の映画（清水宏監督）になったり、ヒット曲として歌われたりしたという。

観察するに、この石碑に隣接する集落は、自然堤防をコンクリートで固めた壁により、川から守られる地形になっている。そのコンクリート堤防にはタイヤル人を象徴するようなタイル絵がつけられている。ここは、かつて山間地で半移動的な生活をしていた人々を定住させた地なのであろう。雨季の増水時には、さぞかし水害の危機にさらされたに違いない。

植民地政府が、山間地の住民を交通アクセスの良い低地に移住させたり、移動性の民族を定住させたりしたのは、ソロモン諸島などオセアニアでもしばしば起こったことである。思わぬ形で、オセアニアと台湾との共通点が見つかったと、中央研究院のソロモン研究者と話をした。堤防に守られた集落には十字架の掲げられた教会と、集会所があり、そこには老人の足となる電動カートがならんでいた。



写真 5. 「愛國乙女サヨン遭難の碑」について解説してくれるウィラン氏（撮影：明星）

3-2. タイヤル人の建築と生活

その後、ウィラン氏の自宅まで招かれた。そこは、水害を起こすと思われる川の上流であり、しかも川よりも数十メートル標高の高い斜面であった。急峻な斜面が、石積みにより棚田状に整地されており、それは表土流出を防ぐための知恵であろうか。ここは洪水からは逃れられるであろうが、斜面崩壊のリスクを避けたり、他地域にアクセスしたりするのは、大変であろう。こちらのほうがタイヤル人にとっての故地であり伝統的景観をなしているが、防災としての地理条件を考えると、先に見た定住地とどちらが恵まれているのだろうか、という考えが頭をよぎった。

招かれた家屋は土間式であり、地面を数十センチメートルほど掘り下げたところが床になった、平屋建てである。台風による災害を防ぐつくりになっている一方、家は思いのほか風通しが良くて、涼しく快適である。

この伝統家屋はウィラン氏が妻と話し合いの末に、現代的家屋という選択肢もある中で、あえて建てたのだという。タイヤル人であっても、建築技術のすべてを受け継いでいたわけではなかったのも、さまざまなところから情報を得たそうである。台北工業学校（現、国立台北科技大学）の教員であった千々岩助太郎による記録もその一つであった。そのほ

か中央研究院も協力を得たが、タイヤル人コミュニティが力を貸してくれたことが大きかったという。



写真 6. ウィラン氏の家に向かう途中の石組（撮影：古澤）



写真 7. ウィラン氏の家の外観（撮影：古澤）

他にも織物、生業、家の完成式典についてなどに話題が及んだ。とても和やかな雰囲気の中で、ご家族から話を聞くことができた。織物の道具は本来他人に見せてはならないという慣習があるというので、写真や詳細はここでは割愛する。完成式典にはコミュニティ外からも人を招かねばならない慣習があり、それを SNS で募集したという、現代的な話もあった。

中央研究院からはメラネシア研究者も参加していた。ウィラン氏の家にあった織物道具の一つを、筆者は太鼓だと誤認していて恥ずかしい思いをしたが、その研究者も同じように太鼓だと思っていたと教えてくれた。このような経験もありつつも、オセアニアのどこかを研究する者同士で、台湾のオーストロネシア語族集団を訪れながら、交流を深められたことは、非常に意義深いことであった。

4.3 日目の発表

5月6日の午後は中央研究院に戻り、研究発表と討論を中心とするワークショップの第3セッションが行われた。本セッションでは、台湾と日本それぞれ2名の研究者による計4件の発表が行われた。主にオセアニアや海域アジアを対象とした各フィールドワークの事例をもとに、タトゥー実践、贈与・交換論、交易ネットワーク、学説史といった多様なテーマについて議論が交わされた。各発表の概要は、次のとおりである。

発表者：Tauateleofiti Suliljaw LUSAUSATJ 葉一飛（台湾中央研究院民族学研究所）

発表タイトル：Crafting Oceanic Tattoo Diplomacies

台湾原住民の出身である葉一飛氏は、自身のアイデンティティと移動の経験を軸に、都市と祖先の土地、台湾とオセアニアを往還する生活史を探究している。本発表ではとくにタトゥーの実践に焦点を当て、その政治性や文化的表象の変遷が論じられた。たとえば、1910年代に植民地政府によって禁止されたアタヤルのタトゥーが、偏見やスティグマを経て、2000年代以降には文化復興の中でアイデンティティの象徴として再評価され、新しい価値観とともに「クラフト」される過程が紹介された。また最後に、台湾・日本・琉球・アイヌを含むタトゥー文化をめぐるワークショップや展示など、今後の共同企画の可能性が提案された。

発表者：藤井真一（国立民族学博物館）

発表タイトル：Gift Exchange as Manipulating Social Relationship

藤井氏の発表では、文化人類学で論じられてきた「贈与が社会関係を形成・維持する」という議論を踏まえ、ソロモン諸島における婚姻儀礼や紛争解決の場での贈与交換の意義が検討された。食物や豚に加え、必ず用いられるという貝貨（シェルマネー）は、消費されず摩耗もしない点で特徴的である。貝貨は交換を通じて、集団間の摩擦や関係構築の歴

史を外在化し、記憶装置として機能する。本発表において、こうした贈与物が、絶えず再編されてきた社会関係を物質的に証拠づける役割を果たしていることが示された。

発表者：門馬一平（国立民族学博物館）

発表タイトル：Ethno-networks and Gift Rituals in the Louisiade Archipelago, Papua New Guinea

門馬氏の発表では、パプアニューギニア沖のルイジアード諸島における贈与儀礼と交易ネットワークの民族誌的研究が紹介された。諸島では、島ごとに陶器やカヌー、籠、貝製品づくりなどの専門性が異なり、人々は外洋カヌーで交易相手を訪ね、長期滞在しながら相互扶助的な関係を築くという。こうした個人的で小規模な交換関係は行政記録には残らないが、地域社会を支える重要な基盤であり、秋道智彌の提唱する「エスノネットワーク」として理解できる。特にサイサイ地域では *SAGAE* という贈与儀礼が交易の動機づけとなり、物質の循環と人間関係の形成を同時に支えていることが示された。

発表者：CHEN Ping-Heng 陳品姮（台湾中央研究院台湾史研究所）

発表タイトル：Between Specimens and Images: Utsurikawa Nenozo's Harvard Dissertation and Indonesia as an Anthropological Field

陳品姮氏の発表では、日本人文化人類学者である移川子之蔵が 1917 年にハーバード大学へ提出したインドネシアの装飾芸術に関する博士論文を取り上げ、その位置づけが再検討された。移川はスマトラから台湾までを含む広域を「インドネシア」と捉え、ヨーロッパや北米の人類学・博物館資料を参照しながら、収蔵品の図版を複製して比較分析を行った点に特徴がある。発表では、当時の欧米人類学との接触が彼の方法論形成に与えた影響を示すとともに、その後の学界で移川の研究がどのように受容され、あるいは看過されてきたのかを問い、地域研究としてのインドネシア／オセアニア人類学の成立史を考える視点が提示された。

以上、3 日目に実施された計 4 件の研究発表の概要をまとめた。このように、第 3 セッションでは、主に文化人類学や歴史学の観点から、従来の国民国家単位の地域研究を相対化し、広域的視野から知見を交換する貴重な機会となった。3 日間にわたる本ワークショップでは、フィールド観察と学術的議論を往還しながら、海域アジア・オセアニア、またはオーストロネシアといった国境を超える広域的枠組みから社会・文化動態を検討することができた。本国際ワークショップを企画してくださった小野林太郎教授（国立民族学博物館）が閉会のあいさつで述べられたとおり、本ワークショップが今後の研究会、共同研究、国際会議の形成に向けた基盤となり、さらなる研究の深化、また学術的交流の発展につながることを期待される。

謝辞

今回のワークショップは、内容が非常に濃く、貴重な交流の機会となった。それも、ひとえにワークショップを企画してくれたそれぞれのプロジェクトリーダーのおかげである。加えて、さまざまな調整をしてくれた台湾サイドのコーディネーター、訪れた場所で案内の通訳をしてくれた台湾側の参加者のみなさまに感謝申し上げます。冒頭に述べた通り、本報告は、未来に続く交流を目指すワークショップの目的への応答の一つである。これが実現したのは、そのような応答の仕方に賛同し、執筆してくださった執筆者のみなさまのおかげである。

<参考文献>

宜蘭県立蘭陽博物館

2026 「教育」『宜蘭県立蘭陽博物館ホームページ』<https://www.lym.gov.tw/jp/education/>（最終閲覧日 2026 年 6 月 15 日）

日高真吾・黄貞燕編

2021 『地域文化を活用する：地域振興、地域活性に果たす役割』 国立民族学博物館。
https://www.minpaku.ac.jp/assets/posts/post-staff/6543/2021_01.pdf（最終閲覧日 2026 年 6 月 15 日）